

1980年を迎えて

新しい1980年代は、日本においては技術開発の主要な年代であることが大きく言われており、誠に意義深い新年を迎えた。また、この年は日立製作所においては、創業70周年という年にも当たり、長い間「日立評論」に対し御愛顧をいただいた諸賢に対し衷心より感謝申し上げる次第である。

さて日本が現在当面している問題としては油の問題、それから派生する経済情勢の先行き、またそれに対する私共に課せられた技術開発の責務であろう。

特にエネルギー問題に対しては、当面の大きな問題で油への依存度を下げて多角依存の方向へ進まなければならないのは日本としての大きな宿題で、原子力、石炭、太陽熱などの依存度を増すことがいろいろ研究の対象として推進されつつある。

最近官、学、民一体となつての研究開発の推進がいろいろな面で図られており、また電気産業界としては、特に原子力発電における信頼性のいっそう確立、燃料サイクルの完備、それに伴う将来炉の自主開発など、また石炭火力に対しては、環境対策設備のいっそうの研究や、ガス化、液化の経済性をも含めた開発の推進など、あるいは太陽熱の利用については、システムとしての設備の開発、素子の研究など、これからの課題としてもまだまだ余地が残されている。また地熱発電や廃熱の再利用、小水力の見直しなど改めてそれらの再検討が大切な時代となつてきた。

一方、エネルギーを消費する側での節約もいろいろ研究が進められている。家庭電器などにおいてもマイクロコンピュータの開発と技術によって著しくその成果が期待され、また生産設備の合理化など、エネルギー消費の節約が最近大きく取り入れられてきている。機器の一つ一つまで今後はそのエネルギー消費量が重要な設計の条件になってきた。

電気産業の現在また将来へのもう一つの大きな問題として挙げられるものに、エレクトロニクス技術の発展がある。資源を持たない日本として、将来附加価値の高いしかもその内容の良い製品に寄らざるを得ない環境のもとで、このエレクトロニクス技術が日本の大きな産業の分野として開けてくるであろうことは言うを待たない。

情報産業、半導体、ソフトウェア技術などこの関連のものは、日本は今欧州を既に後にして、米国に近い高度の技術水準となつてきており、更に今後この種の技術の急速な高度化が進められている現在、研究開発に万全の対策をとることが最も肝要となつてきている。

現在、コンピュータによって事務処理を行なうことはもはや常識となつてきており、生産設備の自動化や家庭電器はもちろん、自動車の運転にまで燃料消費の節約と併せて大きく取り上げられつつある。特に、半導体素子の技術の高度化はその大きな基盤となっている。

電気産業においてはこれまでの基盤技術を更に積み上げ、新しい技術開発、研究をその上に展開して、日本における産業構造の一つとしての責務を十二分に果たすことが今後の責務であろう。私共電気産業に身をおく者は、新しい年代を迎えてその大きな責任を胸に抱き、将来の研究開発への責任を十分果たすことをここに決意するものである。



日立製作所 取締役社長

山本 哲也